

第3回 京都市観光振興審議会

議事録

- 1 日 時 令和3年2月17日（水）16時～18時30分
- 2 会 場 メルパルク京都 7階 スタジオ1「オリオン」
- 3 出席者 別紙名簿参照
- 4 内 容（各委員からの主な意見等）

（若林会長）

- 審議会委員の皆様、そして京都市関係部署の御尽力により、最終案を提案する。
現在、コロナ禍で最も打撃を受けているのが、観光・交通事業者である。これは基本的インフラでもあり、また観光客が戻ってきた時にきちんと対応していくことが重要であることから、何とか支援を進め、助けあっていく必要がある。
- コロナ以前の2019年まで、インバウンドが大幅に拡大・成長する中で、それは非常にありがたいと同時に、市民生活と観光の調和という観点から様々な問題が起こっていたことも事実である。こうしたことが二度と起こらないように、どのような対策・対応を、行政、観光事業者が、市民そして観光客の協力のもとに進められるかということが直近の大きな課題である。
- さらにデジタル化や旅の本質的な魅力を更にどう深めていくかということや、京都観光を通じて、財政面も含めた京都の持続可能性にも貢献するという、良い循環を作ること展望する御議論を、これまで皆様から受け取って進めてきた。本日も最終案について御意見をうかがい、観光の力でより良い未来をつくるために、観光自体がより良く成長、発展、変革する必要があることを御議論できればと思う。よろしく願います。

（本保副会長）

- サブタイトルをつけていただき、「住んでよし、訪れてよし、働いてよし」となった。これまで「住んでよし、訪れてよし」の観光立国推進基本計画に取り組んできたが、今回これに、「働いてよし」が付け加えられたことを高く評価したい。担い手を大切にするというこの本計画の基本精神が良く表れている。政策の柱、全体の姿についても、大変分かりやすく書かれていると評価する。今の時代において、市民も求めている持続可能な観光を柱に据えて、5つのあるべき姿を示し、それに対応する政策が書かれているのも非常に良い。おそらく国内外に対して、「京都ではこうした素晴らしいものを作ったのだ」と言える水準になっていると思う。
- この後は如何に実行するのかということが重要である。そのためにはKPI・指標をつくってしっかりと取組を進めること、またその体制を構築していくことが重要であるが、その点も含まれているので大変結構である。しかし、指標については、まだ工夫の余地があると考え。アウトカム（成果）指標については十分練られているが、そのアウトカムを実現するための政策とのつながり、あるいは個々の政策を講じた結果生まれるアウトプットとの関係がどれだけ精査されているのかについてはやや疑問である。そこが

十分にできていないと成果が上がらないことは明らかであり、これから実行していく中で構わないので、きっちり見極めて、アウトカム・アウトプット、それを実現する政策をしっかりとやっていただきたい。

(田中副会長)

- 感想めいたことになるが、今回の観光振興計画案においては、京都観光の振興がコロナ回復期を見据えながら、過去のオーバーツーリズムの課題と反省も踏まえ、持続可能性に留意し、まずは市民生活と調和し、地域コミュニティや文化の継承・発展に貢献すること、そして観光振興を通じて地域や社会の課題解決、そしてSDGsの達成、豊かなまちづくりにつなげるという明確なビジョンに向けて柱建てし、完成度の高いものになっていると感心した。
- この計画の特徴として、「誰のために、何のために、何を行って、何を目指していく計画なのか」という総合的・包括的観点から計画が編成されたと感じている。京都観光の本質や理念を押さえた、高いメッセージ性を含め、世界の観光都市がこの計画を参考にするような、モデルとして高いレベルでまとめられた力強さを感じている。また、観光産業を京都の基幹産業として、より持続可能な産業に発展させるために、オール京都で取組を進めるという道筋が体系づけられて、構成されている。
- 今後は計画の進捗について、継続的にモニタリングし、マネジメントしていくことが重要である。従来の経済指標だけではなく、市民との調和、あるいは観光事業の担い手の活躍に着目した評価が今回用いられようとしている。さらに根拠に基づいた分析と判断を行うための、KPIの新たな設定など、今後の取組に期待したい。いずれにしても、こうした計画策定とともに、しっかりとマネジメントを行う「持続可能な観光事業」を多面的に評価する仕組みを充実させ、観光産業をより健全に発展させる意思と覚悟を感じた。最後に、今後ある程度地域経済を維持・発展させるために、観光客数の確保は重要であるが、以前のように市民生活に多大な影響をもたらす状態は避けたいところであり、改めて京都観光行動基準（京都観光モラル）の浸透、啓発に努めていきたい。

(長澤委員)

- 前回参加させていただいた折にも申し上げたが、我々はコロナ禍により何を学んだのかということ、まず最初に原点に置きたい。7～8年も前に私は天変地異があっても、政情不安があっても、そしてSARSのようなことがあっても、各方面に申し上げたことがある。危ういところに乗っかって観光産業は成り立っており、これから観光関連に従事している方は大変だと思う。だからこそV字回復も願うわけだが、まずは少しずつ回復し、コロナに教えられたことをまず基本においてまいりたい。以前も申し上げたが、オーバーツーリズムの問題で、今何を考えたかという点である。その際に府市協調の具体的な観光施策を求めたいと申し上げた。逆に、京都市の方々に申し上げたいのは、具体的に府市協調の観光施策はどのように実現していくのか。その後の取組を御提示いただきたい。

(事務局)

- 府市協調と今回の計画の関係について御説明させていただく。まず34ページに記載の5つのまちづくり・観光の実現に向けて必要な観点（横断的な観点）の6番について、DMOを核とした京都での協働、広域連携の推進の中で、京都市や近隣自治体、DMOと連携して、観光課題解決、観光客の満足度向上、各地

域の発展に資する広域観光の推進を目指すことを掲げている。

- そうしたことを踏まえて、第4章「5つの目指す姿の実現に向けた取組」のところであるが、まず35ページの(2)「観光課題対策の強化」の(ア)に「3つの時期・時間・場所の分散や広域観光の推進等による混雑対策の強化」という部分で、京都府をはじめ近隣自治体との連携が位置付けられている。
- また、41ページ(8)の「宿泊観光・長期滞在化の促進」という部分があり、42ページの「推進する主な取組」の(エ)になるが、「京都の宿泊観光につながる広域観光の推進」ということで、市内全域の魅力の掘り起こしをはじめ、市周辺の近隣自治体との連携を通じて、観光客の分散化にもつながる広域観光を推進して、長期滞在化にもつなげるということを位置付けており、こうしたことを計画の中でも具体化していきたい。

(金子委員)

- 観光庁では、観光立国推進基本計画について、来年度(2021年度)から新たなものにする必要があるが、コロナ禍において中々作業が進んでいない状況である。その中で京都市が2030年に向けて、持続可能な観光を十分意識されてこうした計画をまとめられたのは素晴らしいことである。関係者が一致して計画の途中で指標との照合等立ち止まりながら取り組むことが重要であり、また期待している。最終案については非常に良く、実行をぜひよろしくお願いしたい。
- 私から1点御紹介したいのは、文化芸術の豊かな京都市に関連して、国際的なアートフェア、アートビジネスの招聘に向けた動きを一言申し上げる。海外では香港等を拠点としたアートビジネスが盛んであるが、香港は昨今、政治情勢が微妙であり、この機会に日本にアートビジネスを誘致する良い機会ではという意見もあり、官民交えて議論をしているところである。昨年12月に財務省で、外国貨物について関税等を賦課することなく蔵置・展示できる保税地域における国際的なオークションやアートフェアの開催について、考え方を明確にしたところである。国際的なアートフェアに今後御関心があれば、税関・財務省にお問い合わせいただきたい。

(川島委員)

- 最終案は大変良くできているが、MICEについて2点申し上げる。1点目は、最終案33ページと51ページに、MICEの定義が、観光庁のホームページを引用して書かれている。その中で「コンベンション」の定義が、「国際機関、団体、学会が行う国際会議」となっている。これが良く使われているが、実はその中に国内の学会が抜けている。世界的には、MICEの定義には国内の学会も含まれ、実際に京都でも国内学会が数多く行われている。ここは「国際機関、団体、学会が行う会議」とした方が皆様にはわかりやすいと思う。観光庁には申し訳ないが、そうしたほうが分かりやすい。
- 2点目について、パブリックコメントを拝見しても、MICEの必要性やメリットを市民にわかりやすく伝えてほしいというものが多かった。33ページの下に、MICEのメリットとして、「世界の人々が京都に集うことにより、産業・学術等が振興する」と書いてあるが、少しわかりにくい。なぜ世界の人々が集まると、産業・学術が振興するのかという点を、もう少し丁寧に説明していく必要がある。例えば、それにより最新の研究成果が共有され、グローバル・ネットワークが拡大する、研究分野やプロダクトへの認知度が向上する、新しいビジネスや新発見の機会が拡大する、ひいては次世代の人材育成につながるから結果

的に産業・学術等が振興する、とした方が良くと思う。京都は国内有数の学術都市であるがゆえに、ここは特に丁寧に説明した方が良く思う。

(田中委員)

- 計画最終案に目を通させていただき、私のような学生にもわかりやすいものになっていると感じた。例えばSDGsのアイコンなどがあると、やはり分かりやすい。市民の方に読んでいただくのは大事だが、私のようなこれから担い手となる若い世代に向けたメッセージを発信していただければ嬉しい。
- 私は京都の出身ではなく、このように観光に関わらせていただくことは初めてであるが、学生が観光に関わらせていただくのも、京都ならではだと思う。京都のことに関わりたいという学生は多くいるため、市で決めることや色々な機会に学生を参加させていただければありがたい。私も行政に関わらせていただく良い機会をいただき、今後将来を考えるうえでより京都市を良くしていきたいと思った。

(富川委員)

- 3回目にして、短期間にて、このような分かりやすく完成度の高い計画にブラッシュアップされていることに感銘を受けている。デジタル対応や伝統行事の維持にも触れていただき、広域観光については、もはや常識になっているかと思うが、まだまだ目が向いていない部分もあるため、引き続き推進していただきたい。
- メディアの人間として、京都市民に周知することはもちろん、日本全国・世界に向けて京都のモデルを発信する必要があると思う。是非メディアの力を活用していただきたい。また、私はこの計画に参加させていただき、非常に思い入れが強くなっている。今後PDCAを回す機会や計画振興の際にはぜひ仲間に入れていただいて、サポートさせていただきたい。

(原田委員)

- 皆様が褒めておられたところは本当にそのとおりであるが、敢えてコメントさせていただく。1点目は、計画全体のカバーしている範囲が非常に広く、良いまとめになっているが、気になるのは、これを京都ではなく他の市に置き換えた際に違和感が実はなかったりするという。どの都市でも似たようなことを取り組んでいることが多い、あるいは汎用性が高いということがある。そうした意味では京都らしい部分を強調していただければと思う。京都にしかできないことをここに盛り込んで、よりアピールできる内容になっていけば良い。
- また、文章で表現されていることはたくさんあるが、全体的に数字の部分が少し少ない。市民の皆様や外の皆様が、一目見て長く強く残るようなKPIや数字があればと思った。そういう数字や課題がもっと京都の皆様に刷り込まれて、取組が進められたら良い。
- さらに、本計画の拡散、浸透に対して積極的に取り組んでいくべきである。アフターコロナの面では、京都らしいとがった取組を2つほど入れ込んでどうか。特に今、衛生状況やワーケーションがキーワードになっており、京都が率先して取り組んだら良いかと思った。

(矢ヶ崎委員)

- 多くの自治体がこのコロナの後に計画を定めたら良いのかを悩んでいる中で、京都市が先鞭をつけて取り組んでいることは、他の「観光頑張ろう」と考えている自治体にも勇気を与えるものである。
- 3つ申し上げたい点がある。すでに本保副会長から御指摘があったが、指標と政策の関係を、時間をかけてブラッシュアップすることで、京都らしい連関を生み出す必要があると思う。
- 2つ目が、35ページのコロナ禍からの回復期における重点的な取組については良くできていると感心している。分散化と広域連携がしっかり書き込まれていることを評価したい。旅に関するニーズというのはコロナ前後で変わっておらず、現在我慢を強いられている分、戻るときには戻るべきところに集中的に戻るのではないかという予想もある。それを京都市で広域連携による分散を考えているのは素敵である。
- 3つ目は、期待であるが、44ページの(12)について、「富裕層」という言葉から「上質な」に変わったことは素晴らしい。上質な観光客を受け入れる余地が京都にはもっとあり、私が所属している観光庁の委員会には、いわゆる富裕層の消費が今東京にたくさん落ちており、意外と京都には落ちていないというデータもある。もっと京都には受入れも消費も余地がある。市民の中から、トラベルデザイナーというような、上質なサービスを取り扱う人材が輩出されることも大事である。また、個人的に京都市でワーケーションを試みた。ブレジャー、ワーケーションが京都で盛んになる期待もある。

(大田原委員)

- 私たちは内閣府に所属する公的機関として、色々な地域で投資をして、ハンズオンしている。他の地域で観光計画の策定を主体的に行っているが、今回の観光振興計画は非常にレベルが高く、しかも市民からの意見も非常に丁寧に反映させており、すごいなという意見を持った。
- 我々が他の地域で観光計画を策定したときに、地域という大きなしがらみの中で動かしていかなければならないので、どのように推進するのかで、いつも壁に当たっている。本計画の中でも、1つ大きな核となるのがDMOかと思う。各地のDMOについては、今大きな構造課題を抱えており、例えば人や財源、事業推進の問題、そしてガバナンスの問題、意思決定の問題で機能不全に陥っており、進まない部分が多い。一方今回のように、コロナ禍への対応や市民を軸とした、これまでとは異なった大きな戦略をつくり、それを推進していこうという時は、今までと違った戦略をとっていかなければならない。私の好きなアメリカの経営史の学者にアルフレッド・チャンドラーがいる。その人が「組織は戦略に従う」という言葉を残している。新しい戦略をつくったからには、従来の組織ではなく、新しい組織を考える必要がある。今のDMOの問題についても、構造課題があると思うため、再点検をして、課題解決をし、せっかくできたハイレベルな本計画を上手く推進してほしい。

(小川委員)

- コロナ禍の最中に未来を見据えた議論がなされ、こうした最終案がまとまったことは素晴らしく意義のあることだと思う。
- 最終案策定に当たった意見としては、5ページの部分で、今後回復状況を見つめながら改めて目標値の設定と指標の追加を検討するという点を重要視する。現在と第1回の審議会では、コロナ対策も知見を得て変わってきており、それに対応して人々の動き方や意見も違ってきている。また、先行きも不透明

である。例えば MICE に関わる項目は非常に京都の未来にとって大事なことである。しかし、現時点で3年後、5年後の在り方を具体的に想像することは難しい。そう考えると、策定後の重点取組の随時見直しも重要であり、横断的な取組目標を広く投げかけて終わるのではなく、市民や観光に携わる方々それぞれの立場から補強していく計画案とすることで、より誠実な提案という印象をもっていただけるのではないかと。

(小野委員)

- 観光振興計画案を読み、市民生活と観光の調和、それから文化・伝統の維持・継承、市民、観光客、観光関連事業者の適正な関わり、観光による地域経済への貢献など、持続可能な開発目標を目指す意思がはっきりと示されているように感じた。また、市民からの多くの意見が集まり、本計画に大きな期待が寄せられているのではないかと感じた。その意見に対して丁寧に答え、また計画案に組み込まれたり、御意見を寄せられた方に対しても御理解をいただけるのではないかとと思う。
- 先日、コロナワクチンが空輸され、接種されるというニュースが流れた。我々からすると、長いトンネルの先に光が見えたような気持ちになった。清潔で安全、疾病感染症にも適切に対応できるまち。そして先週福島県沖で地震が発生したが、災害時にも支援体制のできるまち京都を大いにアピールし、より一層の安心・安全を担保していくべきである。この計画案で方針・方向性が決まり、これに肉付けをして、市民の方々にも周知し浸透させていくことが大切である。

(山田委員)

- 計画案を拝見し、更にブラッシュアップが進んだと感じた。2点意見を述べさせていただく。
3章の「2030年に実現を目指す5つのまちづくりと観光」の、33ページに具体的なKPIが設定されている。(3)では、「観光の担い手がより活躍し、観光・文化分野での起業・新事業が盛んになり、観光活力の向上や文化の継承に寄与する」と、非常に大事なポイントが描かれている。具体的指標が出ており、正規雇用率や従業員満足度など、挙げられているが、さらに観光立国政策のリーディング都市として、従事者の平均所得や平均年齢など、他産業と比較して、この観光産業がどれだけ魅力的な職場になっているかという視点を具体的にみるには、そうした指標も取り入れられないか。その下に、地域貢献に取り組む観光事業者ということも書かれていたが、どういう手法でとるのか非常に難しそうであり、既にグリーン・デスティネーションに京都市が選ばれていることを鑑みれば、この指標もむしろ事業者階層でGSTC(持続可能な観光の国際基準)を取得した事業者が何社いるかなどで見られればどうかと思った。
- また、31ページの三角形(市民・観光客・事業者)の関係をどう良いものにしていくのか。市民と観光事業者が2つの塊になっているが、ここを如何に融合させるのかということも重要である。オーストラリアは一人当たりの観光支出が世界1位の国だが、聞くところによれば、学校教育の中で旅行の重要性が述べられているようだ。やはり京都市民がリスポンシブル・トラベラー(責任ある旅行者)、サステイナブル・トラベラー(持続可能な旅行者)になっていけば、京都のデスティネーションとしての住民と事業者の理解が進んでいくのではないかと。

(高山委員)

- 本計画は素晴らしいが、一番懸念しているのは、これを推進するための枠組みや人材が、行政やDMOにいるのかということである。コロナ以前にはオーバーツーリズムのようないわゆる観光公害の記事が出ており、市民の意見も含め、昔に戻りたくないということもある。政策に落とし込み、誰がその役割を担うのかということである。
- 利用者が持続可能な観光を分かっていないといけない。市民にも持続可能な観光とは何かという理解を深める機会が必要である。実際に政策を実行するには時間もかかるが、明日から取り組めることもある。例えば脱プラスチックや、歩行者優先のまちづくりなど、わかりやすい政策を目に見えるかたちで推進していければ良い。また、京都市は、世界での持続可能な観光都市100選に選ばれている。世界レベルで推進するには、もっと掘り下げる必要がある。例えばペットボトルを買わずにお茶を飲むなど、そうしたことをやっていただきたい。
- 致命的なことは、行政側にサステナビリティ・コーディネーターがないということ。行政にも、その役割を果たす方を置いていただきたいし、その方の権限が市長と対等に話し合えるようでないとな、形だけで終わってしまうため、どう推進するのかが大切である。

(津田委員)

- この計画案は良く練っていただいている。特にパブリックコメントが入った後、多様な御意見を生かしながら素晴らしいものができたと感じる。私は多くの京都の伝統的なものづくりメーカーとの関係が深いですが、京都の魅力というのは、ある意味クリエイティブな新鮮さと歴史・伝統のすばらしさを味わえるところにある。しかし京都市の財源が逼迫し、政令市の中でも危機的な状況に追い込まれているのはなぜかと考えると、それは私どもメーカーの元気がないということである。観光客が来なくなったことも1つの理由であるが、それ以外にも構造的な問題があるということが、コロナによってあぶりだされたような気がする。色々な魅力を持っている中でも、財政を支えてきたものが何であるかを認識し、良きものを伝えるということにおいて、上質なお客様にどのように伝えるかというシステムが完備されていないように感じる。私たちはメーカーではあるが、観光の担い手という自負心もある。直接ではなくとも、マーケットを広げるという意味で、京都財政にも貢献している。
- それから一番困っていることは、2025までを見据えた計画は素晴らしいものの、50年後、100年後の事業継承や継続性というものがかわってくるということ。また京都にどれだけ地方税というかたちで財政貢献できるかということである。京ものを生活に活かしていただき、お客様の見てもらい方、発信の仕方が今、色々なところで提案されているが、それをどう生かすのかということが私たちの課題である。

(中嶋委員)

- 私どもにとっては、34~36ページのような記載があるのは大変うれしく思う。伝統行事の休止、伝統行事の担い手のことも記載がある。我々の世界はどうしても口で伝えることが多いため、休むと途切れてしまう。神社は毎年同じことを繰り返して続けることが本義であり、それが止まるのは苦しく思っている。その部分に光を当てていただいたのはありがたい。
- 今年の正月は、神社への来訪者は激減した。ただ、お越しいただいた方には、守るべきことは守って参

拝していただいた。そのため、我々の周りにはコロナで困ったことはない。加えて、大きな神社での参拝を避け、近くの小さな神社でお参りをすることが非常に増えた。分散化に気を付けて、個人のお祈りのみならず、コロナや社会のことを祈られたのだと思う。こうした本計画の方針を出されたら、市民の方々は一緒になって手伝ってくれるのだろう。

(西村委員)

- 私ども旅館、宿泊業が、このコロナ禍の影響を一番大きく受けている業界かと思う。この状況の中、私共の社外取締役から、今やるべきは、必要な改善や経費への支出を恐れずに、コロナ終息時に力強く新たな一歩が歩みだせるように体制を整える事が必要、というアドバイスをいただいた。この度の観光振興計画の序文に、「計画策定に当たって」というページが加えられ、1200 有余年の歴史の中で先人達が幾多の危機を、未来のために大きな改革事業に取り組み乗り越えて来た歴史を再認識することが出来た。コロナ危機での観光振興計画こそ大きな意味を持ち、この「計画策定に当たって」に書かれている思いを市民と共有する事が、計画を推し進める力になると思う。
- 観光計画の多方面の取組の中で、過去、現在共に一番重要なキーワードが“人、人材教育”であり、新たに重要な項目が時代の先端の“IT”関連の取組である。ただ京都は和食の中心地であるのにそれに関連する項目がほとんど無いので、食文化と共に、食の安全にも取り組んでいただきたい。(農薬の使用基準値が欧米に比べると非常に甘い)
- ITの重要性がこれからは各分野での必須項目であるが、特に観光関連の回復のための情報発信には切り離せないものである。今回のコロナの状況下での私共への宿泊の予約は、インターネットサイト予約から回復し、より先端技術を使って良く整備されたサイトからの予約は8割を超えた。ただ電磁機器の人体への影響はますます大きくなるので、それらへの対策も重要である。

(福永委員)

- 初回からずっと働く人への視点を取り入れるべきとお伝えしてきたが、今回サブタイトルでは「働いてよし」と表現されている。従業員を抱えている業界としては、大変ありがたい。それから今回中間案にパブリックコメントが寄せられており、単にアリバイ的にとるのではなく、丁寧に回答し、計画に活かされたことで、市民の方も参加したという感覚を持たせたことを高く評価する。このように高い評価の上で3点申し上げる。
- 1点26ページ目に、宿泊施設が拡充され、必要な施設数は満たされていると記載がある。これはいかなものかと。満たされているのではなく、既に過剰な状態であり、しかもこのコロナの時期ですら、まだ工事がなされている。すでに市においてもホテル数、客室数は、過剰だと認識しておられると思うので、「満たされている」という表現は別な表現にさせていただきたく思う。
- それから、2点目。57ページに今後の進捗管理とあるが、単に管理するのみならずPDCAのチェックを入れてもらいたい。今回パブリックコメントが入っているが、1年ごとに進捗状況を報告し、またパブリックコメントを募集するというチェックも必要かと考える。
- それからもう1点、京都市は税収が減額したということだが、ふるさと納税をもう少し活用し、観光振興につなげていくという発想を持っていただければありがたい。

(南委員)

- 今回の最終案について、観光振興のみならず市民生活に配慮しており、非常に良い内容だと思う。我々伏見稲荷地域においても、数年前から取り組んできたことを、本計画において非常に上手に汲んでいただいていると感じており、これを推進していただければと思う。
- その上で、私は地元の観光事業者の声をお伝えしたい。今現在観光客が減っており、事業者としては、観光客に来てほしいが、コロナに感染する不安を持っており、自分自身、家族、従業員の身の安全を守りたいという気持ちが高い。ワクチン接種が始まったが、我々事業者に戻ってくるのはまだ先である。そして、これは永久に効くものではなく、継続接種の必要な可能性がある。日本は医療保険が優れているが、欧米では予防接種の習慣がない。予防接種を受けていない外国人観光客が、今までのように伏見稲荷地域に多く来られた時に、商店の人々は自分の身を守れるのかということに不安がある。そうしたことにも配慮した観光政策をとってほしいということを観光地側としては思っている。

(若菜委員)

- 冒頭の「計画策定に当たって」という文章は、観光事業者のみならず、京都にゆかりのある人々に勇気と希望を与える内容になっているかと思う。「常に観光を進化させるべく挑戦し」のくだりがあるが、やはりコロナ禍で大きな変化が起きており、何を残して残していくのかを見極める必要があり、この計画が復旧ではなく復興に向けた道標になると考えている。
- そして最も共感をしたのは、4ページの観光を振興する意義の2-(2)である。外国人や高齢者など、あらゆる方々に観光を楽しんでいただける環境を整えることで、市民にとっても暮らしやすい包摂性のあるまちになると。それから観光客の来訪によって、バスや鉄道の利用が増え、便が増え、市民の豊かさ、魅力的なまちづくりにつながるということが記載されている。我々が目指すところと同じであり、我々も、住んでよし、訪れてよし、働いてよしのまちづくりにしっかりコミットしていきたい。
- また、計画は実行が大切である。幸い弊社は広域の交通ネットワークと付帯するツールを豊富に有しており、ここにある広域観光やワーケーション、京都西部エリアの新たな活性化、MaaSに協力させていただくという決意を持っている。サブタイトルに三方よしの言葉があるが、その発祥は近江商人の滋賀が発祥。滋賀及び府市協調に向け、鉄道でしっかりと結んで、他の電鉄会社等の公共交通機関とこれまでは競争してきたが、協奏・共創を意識しながらしっかりと安全・安定輸送をお届けしたい。

(オブザーバー 文化庁 村上調査官)

- パブリックコメントの数を見ていると、市民の皆様がどれだけ関心を寄せていたのかということを感じ取れた。計画を拝見しても、バランスのとれたものになっている。5ページの策定趣旨にもあったが、コロナ禍において事業者の気持ちも下がっている中で、観光振興を行う意義を振り返るのは、前向きな姿勢を伝えることにつながる。
- 京都は観光と文化が切り離せない関係である。文化の保護と活用を両立した取組が求められるが、サブタイトルにも、「歴史と文化を希望に変えるまち」とある。観光の計画でここまでしっかりと文化のことが書かれているのは、さすが京都市とを感じる。文化庁でも、「明日の日本を支える観光ビジョン」におい

て、文化財の観光資源としての開花ということが目標の一つに掲げられ、文化財を観光資源として位置付けて、活用を促進する流れが生まれている。近年で言えば、日本遺産の事業や文化芸術振興基本法の一部改正、文化財保護法の一部改正などがあり、今年度は文化観光推進基本法が施行され、この5年で一気に文化と観光の関係が変わったという実感がある。しかしこの文化財の世界では、まだまだ文化と観光というものが新しい領域であり、経験が足りないため、これまで様々な文化と観光に関わる取組をされてきた京都市に、ぜひ全国を牽引していただきたい。

(オブザーバー 京都府 野口観光政策監)

- 先ほどから広域連携や府市協調についての御発言もあった。私どももこの計画をしっかりと受け止め、共に推進していくという決意を申し上げたい。
- 先ほど事務局からオール京都での協働という記載について説明があった。京都市エリアに接しているお茶の京都エリア、森の京都エリア等はもちろん、例えば少し場所が飛ぶが海の京都エリアについても、交通の便が改善されており、隣接はしていなくても、日帰りで行っていただくこともでき、また、宿泊してほしいという気持ちもある。京都で泊まり、丹後で泊まりとなると、また宿泊日数も増えていくのではないか。そうした部分もしっかり連携をしていければと思う。そのためには、単に連携しているというだけではなく、どういったモデルコースがあり、交通機関があり、こういうツールを使えますよということを発信する取組をしていきたい。私たちも、海・森・お茶というDMOがあるが、やはりきちんとした連携をとらないと広域連携はやっていけないということもある。京都府としてもDMOがまちづくり支援法人として更に機能を進化させるような取組も検討しており、私たちも魅力あるコンテンツづくりをしっかり高めていきたい。
- 京都は関西各地へのアクセスも良く、そういう点を伝えることにより、京都の宿泊がさらに伸びるのではないか。私どもは関西広域連合の観光分野事務局を預かっているが、関西広域という観点からも広域連携を考えていただければと思う。
- 先ほど食のお話もあったが、今、府市で「食の京都」という取組を行っている。今後広域連携、府市協調の中で、色々なテーマで御一緒させていただき、地域経済への貢献をすることについて、既存予算のなかで突き合せていくことで、取組が深まることもあるため、今後ともよろしくお願ひしたい。

(西岡部長)

- 33ページに記載の今後5年で実現を目指す観光の取組は、SDGsのゴールのどれかも示されながら書かれており、分かりやすく内容も良いと感じた。
- 今後、この計画をどう実現するかが大事なところであり、特に市民との調和というところで、市民の皆様に御理解をいただきながら、コロナの拡大状況も見極めつつ進めていくことが必要だと考える。京都市や京都府、観光協会、観光関連団体、観光事業者の皆様とオール京都で取り組む道筋も示されているので、商工会議所でも、引き続き、連携して取り組んでいきたい。

(橋爪顧問)

- 前回、私が申し上げたことも踏まえ、全体の志や我々の状況の認識と覚悟のほどを記載いただいた。

また、パブリックコメントを多くいただいたこともありがたい。的確かつ建設的なコメントを多くいただき、本計画に取り入れることができたのは幸いであった。

- 私から3点申し上げたい。1点目は、副題に盛り込まれた「働いてよし」、あるいは「希望にかえる」という表現に関する施策を、今後、検討していただきたいということ。今回、副題で「住んでよし、訪れてよし、働いてよし」「歴史や文化を希望に変えるまち」と良い文言を加えていただいた。ただ副題が最終的に示されたため、「働いてよし」や「希望にかえる」という精神が、全体に十分に活かされていない。あとでキーワードを追加したことの限界であったと感じる。今後、計画を実行する中で、これらの概念を重視し、具体的に展開していただけることを望んでいる。思い起こせば1994年の平安建都1200年の際に「京(みやこ)のぞみ」という可愛らしいマスコットキャラがつくられた。未来への希望ということで、のぞみという名前がつけられたものと思う。のぞみちゃんは、平安の女性が旅に出る壺装束(旅装束)の姿でマスコット化されていた。のぞみや希望をかたちにするということ、都市政策にあって具体的にどう実現するのかを考えていきたい。
- 2点目として、今回は5年間という短期の計画であり、すぐにもさらに次の5年はどうするのかということを考える必要があるという点。コロナ禍がどうなるか分からない中でも、この5年の間に何らかの盛り上がりや、事業者、市民が目標とするような節目の時を設定する必要があると考える。今回その部分が十分に検討されていないため、今後、具体的に考えていただきたい。特に、2024年は京都の歴史的なものが世界遺産に登録されてから30周年の節目となる。京都迎賓館も(建設決定から)30年である。先ほど申し上げた平安建都1200年において様々な事業が行われた経緯があり、それから30年の節目である2024年に京都が大きく盛り上がるような年次としてアピールすることができればと思う。平安建都1230年では切りが悪いが、世界遺産登録30年を一つ、我々が大きな力を合わせる年にしたいと御提案したい。
- 3点目として、京都の観光にあっては、癒しや鎮めなどの発想も重要であることを申し上げたい。京都の先人たちは様々な危機から立ち直ってきた。感染症や疫病から立ち直ったこともしばしばある。今宮神社や玄武神社のやすらい祭りがあるが、平安時代に、感染症でまちがすさんだときに、疫病をまき散らす神々を抑えるために、花笠をかぶって踊り、疫病をまき散らす魔物を癒し、鎮め、治めるというものである。これは京都らしい希望の立て方である。闘うことも大事だが、人々を癒し鎮めることが我が町の魅力である。その時の踊りが、花笠をかぶり、風流(ふりゅう)という、従来なかった非常に自由で華やかで鮮やかな色彩に富んだものであった。京都の伝統的コンテンツの文脈でいうと、わびさびが一つあるが、その対極にあるのがこの風流である。従来なかったものを自由に表現し、多くの人を元気づけることに重きを置いた美意識や価値観が我々の伝統の中にはある。わびさびに対して、風流やばさらの系統の京都らしさが、新型コロナウイルスの流行によって疲れ、多くの方々が亡くなる中で、苦しい先にある我々の求める希望の一つの表現であると思う。ぜひ従来の観光に戻るのではなく、新しい観光をこれから生み出していくのだという覚悟で、今一度原点を見直しながら、次の京都観光に発展させてまいりたい。2025年に向けて、行政のみならず、オール京都で盛り上げていきたい。